

確かな技能と知識が支える ユーザーに喜ばれる畳

父親の跡を継いだ大倉さんは、和室に欠かせない畳を作る1級技能士の職人です。喜ばれる畳を提供するために、自らの技能だけでなく素材などに関する知識やお客様への接し方、わかりやすい説明なども重視しています。とものに働く奥様の果たす役割も小さくないようです。



おおくら・てつじ ●1969年東京生まれ。都立荒川工業高校電気科を卒業後、電気関係の企業に就職。その後畳の職業訓練校で畳製造を基礎から修得する。実家の畳店で仕事を始め、現在二代目として東京足立区で大倉畳店を営む(ホームページ: <https://tatami-ookura.com/>)。1級畳製作技能士、職業訓練指導員。

畳職人 大倉哲治さん

畳の道へ

——このお仕事に就かれるまでの経緯を教えてくださいませんか。

大倉 親がここで畳の仕事をしていた、私も小学生の頃から何かと手伝っていましたね。家族みんなで助け合うといううちでした。

私はもともと計算などが好きで、工業高校の電気科に進みました。電気というのは基礎を学ぶのに数式を解いた方がいいので、すごく楽しかったですね。

卒業して電気関係の会社に勤めましたが、その頃父に「もし畳屋をやりたいのであれば、3年のうちに考えろ」と言われたのです。親が高齢になってきていて、団地の4〜5階の現場などは大変なので手伝ったりしていました。が、仕事として意識していたわけではありませんでした。

それで、ずっと続けていくとしたら何がいいかと自分で考えました。若い時は地味な気がしていましたが、若く「自分の腕」「技能」「伝統」というところがいいなと思った。やりたいという気持ちになったのです。就職して3年、21歳で会社を辞め、湯島にある畳の職業訓練校に3年間通って実技、学科を学びました。

畳の仕事の流れ

——お仕事は実際どのような流れなのでしょう。

大倉 畳は、畳床、畳表、畳縁という構造になっています。畳床は畳の中心で芯材の部分、畳表はイグサでできた畳の表面、畳縁は畳の長辺のフチに付けられる装飾的な布のことで、いわゆる畳の張り替えという場合、

①裏返し②表替え③新畳の3種類があります。

①裏返し

既存の畳の表面にある畳表を表面だけ剥がして裏にひっくり返すものです。安く仕上がりますが、3年くらいが目安です。

②表替え

表面の畳表を剥がして新しいものを付け、縁も替えます。朝、お客様の部屋の家具、荷物の移動をして畳をすべて剥がして引き揚げます。当店に持ち帰り、天日干しをして畳の表面の凸凹や隙間の補修などをし、出来上がったものをお客様のところにお持ちして敷き直す、という流れです。

③新畳

畳床の芯材は20〜30年経つと腰がなくなってくるので、新畳になります。畳の芯材は部屋に合わせて形を加工しますので、新畳の場合は部屋の寸法取りの作業が必要です。杖を壁に当てて長さ、歪みを確認しながらレーザーによる寸法取り器を使って測ります。部屋全体の歪みに合わせて1枚1枚割り寸法について加工し、1週間ほどかけて出来上がったものを古い畳と入れ替える、という手順になります。

縫う工程は、当店内で、**框**(かまち)の短い辺)を巻く**框巻き機**、縁をつける**両用機**を使って行います。框縫いをした後、両用機に載せて縁を縫っていく(平差し)。そして縫った縁を巻き返す(返し縫い)。作業は妻と二人で行っています。

いかにお客様に喜んでいただくか

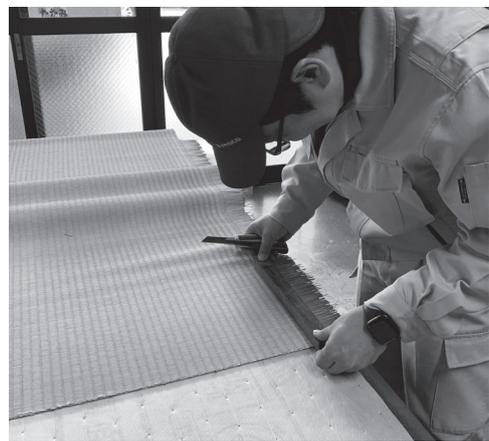
——個人のお客様が中心ですか。

大倉 半分以上が一般のお客様からの直接の注文です。常にその日はそのお客様だけのために作業をする。そのお客様の紹介で次の注文の連絡をいただいたりします。畳屋というのは家の中に入りやすく、変な人に入ってきてほしくない。うちの場合は妻と一緒にいくので安心される面もあると思います。私が気づかない目配りもすごく喜ばれたりする。

いかに「また頼みたい」と思ってもらえるか、わかりやすく説明できるか、という接し方の部分も大切だと思って



畳表の原料イグサの生産農家（熊本県八代市）で刈り取りのお手伝いをした時の様子。



畳表の表面は山・谷・山・谷と織り込まれており、畳縁を縫い付けた際に谷がちょうど見えなくなるように目押し定規を使って畳表の切り位置を確認し（写真右）、畳表の上前（うわまえ：畳同士がつながるほう）を畳の大きさに合わせて長い6尺定規でまっすぐ切り落とす（写真左）。

信を持っていきます。自分の技術には自信を持っていますし、仕事を楽しんで

私、売上をどんどん伸ばしたいとは思っていません。自分の技術には自信を持っていきますし、仕事を楽しんで

——お仕事のやりがいほどのようなところでしょうか。
大倉 サラリーマンと違い、畳屋はエンドユーザーのところに行って直接接するわけです。「きれいにしてくれてありがとう」と喜んでもらえる。自分のやったこと、自分の腕によってお客様に喜んでもらえるのは気持ちいいし、やりがいになります。

クレーンなど大変なこともあるんですが、それをクリアすれば嬉しい。嫌だ、行きたくないという時こそ、すぐに行ったほうがいい。話を聞き、きちんと説明すればだいたい納得していただけます。

——作業の上で気をつけていることは何でしょうか。
大倉 イ筋というイグサの筋があるんですが、必ず真っ直ぐになるように張ることを意識しています。畳の基本的な勉強をした職人なら大抵そうしていますね。
また、寸法取りの方法は標準と簡易とがあつて、最近は荷物があからと簡易でやることもあるんですが、私は標準寸法取りで細かく測りたいんです。標準寸法取りだと、畳を剥がしてみると寄せの厚さが場所によって違うところがあるのがわかるんです。

やっていきます。お金を稼ぐためだけにやると苦痛になつてしまい、それが態度、対応に出てくる。お客様を不快な思いにさせてしまうことなく、喜んでもらえる対応、接し方ができればいいと思つています。不動産屋さん、内装屋さん、工務店さんなども顧客ですが、一般の個人宅のお客様が一番多いですし、これからもメインになるでしょうね。

価格に見合ったものを提供する
——お仕事の厳しい面はどういったところですか。
大倉 一番辛かったのは、バブルがはじけてデフレスパイラルになつた頃ですね。それまでの価格帯が通用しなくなつた。お客様のところに見積りを持っていったも、「チラシで宣伝しているこっちは業者はこんな安い」と言われる。畳職人ではない人が作る安い業者が広がって、数字だけで見られる。価格に見合ったものを提供していることをどうすればわかつてもらえるかというのを考えましたし、勉強しましたね。

イグサ産地の熊本の農家さんのところに直接行って、何が畳にとつて本当にいいのかということも学びました。それまでは近くの間屋さんから、なるべく安く仕入れたものをお客様に安く提供することを考えていたんですが、やっぱりいいものはいいし、価格も高いけどそれだけの価値がある。そういうことを学ぶと、お客様に対して説得力のある説明ができます。

若い人へのメッセージ
——畳に興味を持っている若い人に何か伝えたいことはありますか。
大倉 今風の新しい畳もたくさん出ていますし、素材もいろいろあります。畳の厚さは60ミリが基本で、そのくらいあると上で跳ねてもあまりうるさくないですし、クッション性があつて安全でもあります。スリッパは脱いで上がるので清潔感があり、湿気も吸います。畳のこうしたよい点をもっとアピールできればいいなと思いますね。

若い人も今までと違った発想でやれば、魅力的な仕事に変わってくるのではないのでしょうか。「これでいいや」とか「こういうもんだ」とかいう決まった形を壊して行って、今の時代に合うように、今のお客様に喜んでもらえるようなものを提案していけるのではないかと、まだまだ発展形があるのでないかという気がします。

大倉 人生は山登りのようなもので、山頂に向かって登っていく途中に大きな岩が必ずある。嫌だから避けて続けていると、歳をとつても同じところにいるままです。乗り越えることで新しい世界が見えてくるし、成長していきます。自分が今できることをこつこつ、一つひとつやっていくうちに、いつのまにか上のほうに行けるのではないのでしょうか。

大倉 人生は山登りのようなもので、山頂に向かって登っていく途中に大きな岩が必ずある。嫌だから避けて続けていると、歳をとつても同じところにいるままです。乗り越えることで新しい世界が見えてくるし、成長していきます。自分が今できることをこつこつ、一つひとつやっていくうちに、いつのまにか上のほうに行けるのではないのでしょうか。

大倉 人生は山登りのようなもので、山頂に向かって登っていく途中に大きな岩が必ずある。嫌だから避けて続けていると、歳をとつても同じところにいるままです。乗り越えることで新しい世界が見えてくるし、成長していきます。自分が今できることをこつこつ、一つひとつやっていくうちに、いつのまにか上のほうに行けるのではないのでしょうか。

大倉 人生は山登りのようなもので、山頂に向かって登っていく途中に大きな岩が必ずある。嫌だから避けて続けていると、歳をとつても同じところにいるままです。乗り越えることで新しい世界が見えてくるし、成長していきます。自分が今できることをこつこつ、一つひとつやっていくうちに、いつのまにか上のほうに行けるのではないのでしょうか。

大倉 人生は山登りのようなもので、山頂に向かって登っていく途中に大きな岩が必ずある。嫌だから避けて続けていると、歳をとつても同じところにいるままです。乗り越えることで新しい世界が見えてくるし、成長していきます。自分が今できることをこつこつ、一つひとつやっていくうちに、いつのまにか上のほうに行けるのではないのでしょうか。